神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	一九一〇年日英博覧会について
著者	國　雄行
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 22 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1996 年（平成 8 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

【研究ノート】

一九一〇年日英博覧会について

國　雄行

はじめに

一九一〇（明治四三）年五月一四日から一〇月二九日まで、イギリスはロンドンのシェファーズブッシュにおいて日英博覧会が開催された。日英博覧会に関する研究は管見の限り殆ど無い。山本光雄『日本博覧会史』[1]に若干の解説が載せられている程度である。本書で山本氏は「本博覧会は日、英両国におけるいわゆる国際相互博覧会である」としている。

明治政府は一八七七（明治一〇）年に東京上野で内国勧業博覧会を開催して以来、国内で全五回の内国勧業博覧会を開催して産業を奨励するとともに、国外での万国博覧会にも積極的に参加し、東洋の一小国である日本の存在をアピールしてきた。日英博覧会は内国勧業博覧会でも万国博覧会でもなく、その性格は曖昧である。そこで本稿の目的は日英博覧会の開催過程に重点を置いて分析し、問題点を浮き彫りにし、本博覧会の実態を究明するところにある。

第一章　開催過程

一　日本政府の動向

日英博覧会の開催計画は一九〇八年一月九日、「日英博覧会ノ計画ニ関スル件」[2]として在英の特命全権大使小村寿太郎から外務大臣林董に伝えられた。これによれば同年にロンドンのシェファーズブッシュで開催される英仏博覧会の設備を利用し、その主催者である博覧会々社の代表キラルフィーが翌九年に同地で日本博覧会を開催しようと申し出て来たというのである。しかし不思議なことにこの通信には表題以外に「日英博覧会」という文字はどこにも出てこない。文中には小村が英仏博覧会の概略を述べたあと、キラルフィーが「日英両国ノ関係ニ鑑ミ、仏国ニ於ケルト同様此種ノ博覧会ヲ開催スルハ最モ望マシ」いと、一九〇九年、ロンドンで日本博覧会を開催する意向があると記されている。キラルフィーが申し出てきたのは「日本博覧会」の開催であったが、小村はキラルフィーが言った「仏国ニ於ケルト同様此種ノ博覧会」というところを日英博覧会と解釈したようである。これが意図的であったかどうかは不明である。三月六日、さらに小村は林に対し参加するか否かの返事を迫っており、当博覧会開催は「現下ノ日英関係上利益多カルヘシト思考ス」と申し添えている。[3]これに対し、林は以前、渡英中にキラルフィーから本件についての話を聞いていたらしく、翌七日に小村に対し

「博覧会ノ件ハ、本官貴地在任中、同人ヨリ申込ミシコトアリシカ、当時ノ計画ハ日本風俗ノ実体ヲ示スヲ目的トシ、博覧会ト謂フヨリハ寧ロ、ミセ物的ナリシヲ、今回ハ実際如何ノモノニヤ」と、博覧会計画の詳細を報告するように伝えている。(4) この要請に対し、小村はキラルフィーに問い合わせたが、その結果、「今回ノ計画ハ全ク従来ノモノト異ナリ、頗ル真面目ニシテ彼ノ『アールスコート』ノ類ニアラス、又先方ヨリ最初ノ申出ハ単ニ日本博覧会トノコトナリシカ、更ニ問合タルニ、若我政府ニ於テ希望セラルルナラハ、日英博覧会トナスコトモ出来候ヘシ」と応えている。(5) 小村の再確認により博覧会の性質が「見世物的」ではなく「真面目」なものであることが確認されるとともに、キラルフィーが初め企画したのは「日本博覧会」であったことが明確となった。しかし、小村は当初から日英博覧会と解釈しており、この後も日本博覧会でなく日英博覧会として計画は進められた。

一九〇八年七月一四日、第一次西園寺内閣が倒れ第二次桂内閣が成立すると、外務大臣は林から、話を持ち出してきた小村に交代した（七月一四日から八月二七日までは陸軍大臣寺内正毅の兼任）。これ以後、日英博覧会の開催を目標に経費や開催条件等が調査されていき、その結果、一〇月一六日、閣議では一九一〇年を期して開催することが決定された。開催の主旨として「帝国政府ハ曩ニ日英同盟ノ帝国外交ノ骨髄タルコトヲ確認シ、今後該同盟ヲ厳守スルト同時ニ益々日英同盟ノ関係ヲ親密ナラシムルノ方針ヲトルヘキコトヲ決定セリ。然ルニ両国々交ノ親善ヲ計ルニ方リテハ、啻ニ両国政府間ノ親交ヲ敦クスルヲ以テ足レリトセス、更ニ進テ両国々民ヲシテ事実ニ於テ其親睦ノ至情ヲ表彰セシメ以テ其結合ヲ鞏固ナラシムルコトヲ必要ナリトス。……日英両国ニ民間ノ親睦ヲ事実的ニ表彰スルハ両国々交上必要ナル所ニシテ日英博覧会ノ開催ノ如キハ右ノ目的ヲ達スル為、最適当ノ方法ト認ムル」と記された。(6)「曩ニ日英同盟ノ帝国外交ノ骨髄タルコトヲ確認」とは、同年九月二五日、小村の帰国をまって閣議決定された第二次桂内閣の外交基本方針を指す。この基本方針に則り、政府は日英同盟厳守→国交の親善→両国民の親睦→日英博覧会開催、という図式を導き出したのである。小村はイギリスの博覧会々社が申し入れてきた日本博覧会計画を日英博覧会に改めて国交親善の道具に使おうと考えたのかもしれない。

博覧会開催が閣議決定された後、政府は予算獲得のため議会説明にあたった。一九〇九年三月四日、農商務大臣大浦兼武は第二五回衆議院予算委員会で、日英博覧会についてその計画を述べて予算要求する。「抑々此計画ハ両国間ノ通商貿易ヲ発達セシムルト同時ニ、且和親ヲ深厚ナラシムルニ於テ、頗ル適切ノ事業ニ属スルモノト存ジマス」と述べ、対英貿易における輸入超過の状況を示し、この原因を「我製品ノ価値ヲ英国人ニ示スノ機会ガ乏シイカラ」であるとしている。そこで日英博覧会を開催することにより「我貿易ノ発達ヲ助成」し「両国間ニ従来存在セルトコロノ和親ノ関係ヲ愈々深厚確実ナラシ」めようというのである。(7) 議会説明では「国交親善」と

いう日英博覧会の開催目的に、さらに「貿易発展」が加えられた。これに対する質問であるが、博覧会参加を前提とするものが大半であり、博覧会の内容に鋭く切り込み開催を反対するようなものはなく、「一八〇万円の予算ではむしろ不足ではないか」、「英国政府やロンドン市からは補助金は出ないのか」等の質問がだされたが、特に紛糾せずに予算案は分科会に回されることとなった。三月六日の予算委員第五分科会では「日英博覧会ハ日英ノ国交上及産業上共ニ必要ノコトナルニ依リ満場一致ヲ以テ原案ノママ可決スヘシ」[8]という意見が採用され、予算案は原案のまま通過するに至り、貴族院でもやはり問題なく通過した[9]（さらに第二六議会では追加予算二八万円が認められた）[10]。同年四月、日英博覧会総裁に農商務大臣大浦兼武、副総裁に松平正直、名誉総裁に伏見宮貞愛が選ばれ、日英博覧会事務局が設置されるとともに日英博覧会規則が発布された。これにともない五月一五日から副総裁の松平を中心に民間団体である日英博覧会出品協会が設立され、東京、横浜、神戸、門司には出張所が置かれ、近隣府県の諸事務を担当した。また東京、京都、大阪、神奈川、兵庫、愛知、静岡、島根に出品協会と連動する協会や同盟会等が設立され、出品物の蒐集に乗り出した。出品協会は出品人を以て組織された団体であり、出品管理を行うものである[11]。例えば神奈川県では県庁内に日英博覧会神奈川県出品協会が組織され、名誉会長に県知事周布公平、顧問には横浜市長の三橋信方、横浜商業会議所会頭の大谷嘉兵衛や小野光景、委員長に茂木保平が就任した。また、神奈川県と横浜市からは協会に対し補助金が交付され官民一体となった出品体制が確立され、「協会成立後ハ当業者ニ直接シテ勧誘スルコトハ専ラ協会之ニ当リ、横浜市内ハ勿論、津久井郡、足柄下郡、愛甲郡、鎌倉郡、三浦郡等ニ事務員ヲ特派シ勧誘ニ努メタ」のであった[12]。

二　イギリス側の動向

日本政府が博覧会の開催目的に日英同盟と国交親善、貿易発展を強調し、積極的に参加するのに反し、イギリス政府はこの博覧会をさほど重要視していなかったようである。もっともイギリスでは慣例として政府が博覧会を援助することはなく、日英博覧会の計画は日本政府とイギリスの一企業との契約により進められていった。また、日本政府がこの博覧会に「日英」を強調するにもかかわらず、イギリスでは特に「日英」にはこだわっていなかったようである。新聞の初期報道では日英博覧会（Japan-British Exhibition）とは報道されず、同三月二九日付の「タイムズ」、四月二四日付の「タイムズ」および「モーニングポスト」の記事では、“Japanese Exhibition”となっており、ようやく五月二〇日の「デイリーテレグラフ」から“Anglo-Japanese Exhibition”となり日英の意味がでるようになった[13]。日英博覧会の報道は「日英博覧会」でなく「日本博覧会」で始まったのである。

日本政府としては開催主旨で「日英同盟」を強調した以上、イギ

リス政府の賛同は必要であると考えていた。しかしイギリス政府の反応は鈍かった。一九〇九年四月七日に在英の特命全権大使加藤高明が小村にあてた報告によれば、イギリスの外相グレイは日英博覧会について「歓迎被致居候モノトハ見受難ク、何レカト申セバ寧ロ冷淡ナル態度」であり[14]、イギリス政府も同国議会での日英博覧会に関する質問に対し博覧会々社への援助金支出は無いと言っている[15]。それでも加藤とグレイ外相との二回目の会談の際に、加藤が「日本政府ハ斯ク其力ヲ尽シツツアルガ故ニ、英国政府ニ於テモ相当ノ力ヲ致サレン事ヲ希望ス」と述べると、グレイも「日本政府ガ斯ク迄力ヲ尽シツツアレバ当方ニ於テモ勿論出来ル丈ノ協力ハ致ス可シ。但シ英国政府ハ如斯企画ニ対シ補助金ヲ与ヘタル先例ナシ」と述べ、最後には「日英同盟ニ対スル当国人ノ『インテレスト』ヲ維持増進スル上ニ於テ本博覧会ハ効果アルモノト信ズ」と態度を和らげているが[16]、補助金は出さない姿勢は変わらなかった。

一九〇九年一一月一〇日、加藤はロンドン市長就任の祝賀会でロンドン商業会議所国際博覧会委員会長のアルバート・ローリットに会った。そこでローリットは日英博覧会に関しては「英国側、何トナク不人気ニ付、商業会議所ヲ動カシテ政府ニ迫リ、幾分ノ補助金ヲ出サシムル運動ヲ為ス筈ナリ」とイギリスでは博覧会が「不人気」である状況を伝えており、そこで商業会議所に働きかけて政府から補助金を出させようと述べている。しかし、加藤はこの話を「出来ソウモナキコト」と述べている[17]。

開会の一ヶ月前の四月一七日になっても、イギリス国内の日英博覧会に対する「冷淡」な状況は一向に変わらなかった。加藤から小村に対し「日英博覧会ノ眼目ハ日本部出品ニアリテ、公衆ハ之レヲ観ンカ為メニ来集スルモノニシテ英国出品ノ如キハ其圧倒ヲ受ケ、毫モ来場者ノ注意ヲ惹カサルベシトノ潜入的観念ノ深ク英国出品者ノ心裡ニ存在シ」ているため「商業者ノ見地ヨリ利害ヲ打算セル彼等ヲシテ参同ニ躊躇セシムルモノ多キハ明白ノ事実」であると伝えている。日本の出品者は日本政府が場所を無料で提供するが、イギリスの出品者は「高価ナル面積料ヲ支払」わなければならなかったこともあり、出品が消極的であったようである。また、イギリスの「出品人数ハ日本出品ノ人数ニ比シ大ニ遜色アリト雖モ其代リ軍独ニシテ巨大ノ面積ヲ占メ大仕掛ノ出品計画ヲタテタルモ勘カラス」[18]と、イギリス軍の出品のみが目立ったようである。加藤はイギリスの出品が消極的である理由を、日英博覧会の主眼が日本出品にあること、イギリス側の出品が有料であることをあげているが、前述の新聞報道等をあわせて考慮すると、日英博覧会はイギリス人からみれば実質的には日本博覧会であり、そこに出品しても有効ではないと考えられていたようである。さらに出品が集まらない理由として博覧会々社のキラルフィーの悪評がある。

一九〇九年七月一三日、日英博覧会事務官の陸奥広吉が宣伝のため各新聞社に記事を掲載しようとしたところ、新聞社からは歓迎されなかった事実を報告してきている。この理由として陸奥は「乍遺

憾、我博覧会ニ対スル当国ノ人気未タ其程度ニ達セザルト、開会期前、尚ホ多クノ時日」があることの他に、「キラルフィー氏人望問題」[19]があるというのである。さらに八月一四日にはキラルフィーの英国内の悪評について同氏が「身ヲ市井ニ起シ、高等ノ教育ナク而モ其辣腕ニ由リ、事業上著大ノ成功ヲ博シ、巨万ノ富ヲ為スニ至レル、同氏一流ノ人ニ於テ屡々見ル所ノ性格ハ、往々ニシテ世間ノ同情ヲ買ハサルモノアリ」と述べている。[20]陸奥はキラルフィーをかばっているが、同氏のイギリス内での悪評により出品が進まなかった可能性も考えられる。

三　開催方針の相違と余興

一九〇九年三月三一日、キラルフィーとの契約書が調印され博覧会の準備は進められていったが、[21]その過程で両者の博覧会に対する目的の違いから大きな齟齬を生じるに至った。つまりキラルフィーは企業主であり日本政府とでは博覧会に求めるものが当然違っていたのである。一九〇九年八月二四日、この点を加藤は「両者ノ着眼点ニ多大ノ径庭アリテ相互ノ意志、亦従ッテ疎通ヲ欠クモノアルガ如ク被見受候件々有之候」と述べ、以下のように伝えている。[22]日本は「帝国最近長足ノ進歩ヲ表明シ、各種ノ生産ヲ顕著ニシ、以テ同盟国民ノ敬信ヲ買ヒ、併セテ我通商ノ増進ヲ図ラント欲スルモノ」を出品し、「公衆ノ喝采ヲ博シ得ルトモ苟モ世界一ノ強国タル本邦ノ地位ニ対シ、毫末モ不釣合ナリトノ懸念アルモノハ容赦ナク之ヲ排斥セントスルノ態度」で臨んでいた。つまり日本の「期スル所ハ純然タル最高等ノ美術及商品展覧会ニ」あったのである。これに対しキラルフィーは「我博覧会ヲシテ美術館兼商品陳列所ナルト同時ニ、一ノ大規模ナル公衆娯楽場タラシメントスルニ有之。……アットラクションスヲ以テ博覧会設計上ノ一ノ大眼目ト為シ」ている。しかしアトラクションと言っても「素ヨリ単ニ興業物ヲ指スニアラズ、最モ広汎ニ之ヲ解釈センコトヲ主張シ、日本庭園ノ如キ最モ其重要ナルモノタリ」としている。そしてキラルフィーに言わせれば「要スルニ博覧会ハ先ツ娯楽場トシテ観覧人ヲ誘招シ、不知不識ノ間、漸次陳列品ニ対スル彼等ノ観察研究ヲ馴致セザルベカラズ」というのであった。イギリスの出品物と比肩しうる最高等の出品物を出品しようとしている日本と、企業として入集め＝入場料収入を当て込み、出品物の質よりアトラクションを重要視するキラルフィーとの博覧会に対する姿勢の違いが表面化したのである。

そこで加藤は「当国経営者ノ意見ニ左袒スルヲ以テ我当初ノ目的ヲ達スルノ道」を取ろうというのである。つまり「多少我素志ニ反スル点アリトモ、之ヲ犠牲ニ供スルノ覚悟ナカルベカラズ。……抑々右成功ナルモノハ具体的ニ果シテ如何ナルモノヲ指スカト云ヘバ、同盟ニ貿易ニ関スル多々ノ事由可有之候得共、畢竟如此ハ将来ノ問題ニ属シ差当リ其標準ヲ博覧会来館者ノ多寡ニ執ラサルベカラザルヤ論ナシ。……如何トナレバ極メテ少数ノ有識者ハ高尚真面目ノ我出品ニ対シ趣味ヲ有シ、之レガ観覧ヲ目的トシテ来会スベキモ、滔々

タル一般ノ公衆ハ右出品ヲ観ルト共ニ我庭園ヨリ太神楽ニ至ル迄ノ諸種ノアットラクションスヲ楽マンガ為メニ雲来スルモノニシテ、多数ノ観覧者ヲ集メントセバ是非共、彼等ヲ満足セシムル這般ノ設備ナカルベカラズ。……当国ノ人心ハ、必ズシモ日英同盟ノ為メニ我博覧会ヲ歓迎スルモノニ無之、同会ガ衆望ニ振合スル所以ノモノハ……極東帝国ノ事物ヲ探ラントノ観念ニアリ。……若シ彼等ノ好奇心ニ訴フルノ用意充分ナルニ於テハ、其失意之ヲ逆睹スルニ難カラズ。折角ノ開催、其甲斐ナク空シク錆沈ノ状ヲ呈スルニ至ル。……囲碁ヲ制セントセバ捨石ノ要ヲ知ラザルベカラズノ譬ニ鑑ミ」て出品にあたるというのである。これに対し大浦兼武農商務大臣は「加藤大使ノ意見ノ主旨ハ逐一諒承シ」たと賛意をあらわした。[23] 博覧会や博物館の展示業務に携わる者は誰でもこのような問題に突き当たる。展示の評価は、その展示物の内容よりもどれだけ人を集めたか、すなわち入場者の数により判断される場合が多い。高尚な展示物は高尚ゆえに難解な場合もあり集客能力に乏しい物もある。二〇世紀も終わろうとする現在、多くの入場者を期待するあまり、展示物の質を落とし、それが博覧会か遊園地か、博物館かアミューズメントパークか判断不能な施設が年々増加している。斯業における展示技術は明らかに進化しているが展示内容は退化しているのが現状である。閑話休題。分析を進めよう。

結局、加藤の弁が大浦の認めるところとなり出品物中におけるアトラクション＝余興の重要性が増すに至った。その結果、余興は魔術女水芸、軽業、太神楽、女剣舞、角兵衛獅子、独楽廻し、魔術飴細工芸、美術陶器製造家、画工、蒔絵師、七宝職工、縫箔女工、提灯製造職工、金銀細工職工、造花女工、桶製造職工、傘製造職工、大道行商飴屋、花売、シンコ細工、陶器画工、岐阜の鵜飼い、農民、台湾生蕃、北海道アイヌ、煎餅焼職工、木彫職工、山雀芸が催されることとなった。[24] 加藤は「囲碁ヲ制セントセバ捨石ノ要」ということで余興を設定したが、この余興の種目をみれば、当初、林董外務大臣が疑念をもったとおり見世物市となってしまった感が強い。

第二章　開会と景況

開会の期日は五月一二日と定められ、盛大な開会式が挙行される予定であった。しかし、五月七日、皇帝エドワード七世が突如亡くなるという悲劇が起こってしまった。開会式は当然中止されたが、博覧会は二日遅れの一四日に開会することができ、予想に反して大盛況となった。「タイムズ」は開会して初めての日曜日の状況を左の様に伝えている。

The Uxbridge Road enterance to the Japan-British Exhibition had to be closed temporarily three times yesterday- 1.30, 3, and 4 o'clock to check the ingress of the visitors. The officials declared that the number of persons admitted established a "record" and certainly there were

vast crowds in the grounds and within the buildings. One estimate of the number is half million; but that is probably beyond the actual figure. Though the provision for the refreshment of visitors is much greater than it was at the Franco-British Exhibition, there were long queues all the afternoon outsidethe restaurants and cafes. The railways and tramways carried many thousands to the Exhibition, and the stallholders within also report a most profitable day.[25]

和田事務官長の報告にも、同一六日は日曜日と重なったために入場者の数は夥しく、「混雑ヲ防ク為メ数度正門副門ヲ閉チ場内ハ肩摩轂撃シ売店ハ客充満シ茶店ハ大入ニテ数千ノ客入口ニ立チ入店スルヲ得ス」[26]と記されている。タイムズの記事と和田の報告を照らし合わせても当時の盛況ぶりがよくわかる。また、『日英博覧会出品協会事務報告』には「博覧会ニ対スル英国上下ノ人気ハ頗ル良好ニシテ意外ノ盛況ヲ以テ迎ヘラレタリ」[27]と記されている。イギリス政府や出品者の消極的な態度とは異なり、会場は「意外の盛況」を呈した。

順調な滑り出しを見せた博覧会であったが日本政府は手を抜かず、マスコミを積極的に利用した。まず政府は「日英博覧会ヲ世ニ紹介セシ為メ各地方新聞記者団体ヲ順次招待」した。五月三一日、シェフィールド、マンチェスター等イギリス北部地方から三六社を、六月一四日にはイギリス東北地方のヨーク、ニューカッスル、スカーボロ、バーウィック等から一五社を招待している。また、六月一八日には日英新聞記者の会合が開かれ、イギリスからはタイムズ等の有力紙の記者約二〇名、日本からは、国民新聞、大阪朝日新聞、時事新報から数名が出席し、和田事務官長は「日英博覧会ノ成功ニ日英新聞記者諸氏ノ後援ニ俟ツコト大ナルカ更ニ日英両国間同盟ニヨリ世界文明ノ最大目的ヲ成就セシ為メニ充分助力セラレンコトヲ望ム」と語った。[28]会場はイギリス南部のロンドンなので特に北部に力が入れられ、イギリス全土に宣伝が行き届くように配慮したようである。

それでは博覧会を見学した人々の感想を見てみよう。八月二五日の「日英博覧会事務局出張所報告書」では帰英中の某在日イギリス領事官の話を載せている。

I spent from 11 to 5 at the Anglo-Japanese Exhibition and think I got a good general impression. My opinion is that Japanese have done extraordinarily well, the British not quite so well- due doubtless to the King's death which interferes with many of the British arrangements and this perhaps accounts for the unfinished state of the exhibit which are also not over plentiful; but it must be remembered that it is the Japanese and not the British goods which will be looked at by visitors.[29]

皇帝の死が、たたでさえ多くない英国出品に悪影響を与えたこと

と入場者が日本の出品物に惹かれていることが記され、日本出品は評判がいい。これに対し小坂順造は「日英博覧会ハ日本博覧会ニシテ日英博覧会ニハ無之候。出品者、政府ヨリ出張員、見物者皆々不平、得意者ハ和田某一人ノミニ有之可申候。英国側ニハ出品ナシ、スクナクトモ出品ラシキ出品ナシ」と述べ、出品物は「陸海軍省ノ品少々ト洋服屋ノ広告ノ人形ノミ」であると酷評を下している。(30)

このようにイギリス出品については開会前から開会後までマイナス評価が目立つ。実際にどのような出品物が展示されていたか把握したいが、管見の限りイギリス側の出品目録が無いので、詳細な出品分析ができない。そこで『日英博覧会出品協会事務報告』に掲載されている各館の案内によりその概要を左のように分別した。(31)

日本関係出品は二号館（漆器、銅器、陶磁器等）、三号館（七宝、木版画、鉄道院出品）、四、五号館（博覧会々社による日本式パノラマ）、一二号館「歴史館」、一三号館「織物館」、二三号館「殖民館」、二四号館「政府館」、三六号館「台湾喫茶店」、四七号館（文部省、山林局出品）、日本庭園、余興。

イギリス関係出品は七号館「ホール・オブ・サイエンス」（官庁出品）、八号館（ロンドン市参事会出品）、一四号館（風俗出品）、一九号館（貴金属出品）、二八号館（楽器類）、四八号館（通運部出品）、四九号館「機械館」、五一号館「ニュージーランド館」

日英関係出品は六号館（日本風景、日露戦争写真、ロンドン南部鉄道出品）、二一号館「富源館」（日本天産物、イギリス化粧品等）、二六号館「美術館」。

以上、イギリス展示のみのパビリオンは八館あり、イギリス出品が殆ど無いとした小坂の指摘はややオーバーである。しかし目立った出品物といえば七号館「ホール・オブ・サイエンス」のイギリス海軍省出品の戦艦グレートハレーからドレッドノートに至るまでの船形ぐらいであろう。ともあれ博覧会の中心は日本の出品物であり、会場の二カ所に設けられた日本庭園や各種余興により、博覧会はさらに日本的色彩で染められたことは事実であろう。イギリスと比肩しうる出品物を展示したかった事務局員たちには、不服であったこれらの余興は、会場では大人気であった。特に、相撲や柔道、アイヌ等に人気は集中したようである。図（次頁）は七月九日の「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」である。この日の紙面には二頁にわたって博覧会の様子が描かれている。中央左には相撲、右には台湾原住民、そのまわりには提灯づくりや柔道、独楽回し、アイヌ人等が描かれている。この紙面の下部には“Quite a number of Japanese Ainus, and Formosans are to be seen The Angro-Japanese Exhibition at Sheperd's Bush, the Japanese plying arts and crafts of land and showing their method of wrestling, the Ainus and Formosans showing life as it is lived in their villages.”と記されており、イギリス人が何に興味をもったかがよくわかる。これらの余興はイギリス国外からも反響を呼んだ。「日英博覧会ニ於ケル日本部ノ出品及余興カ外国人ノ意ニ投シ各地ノ新

LEAVES FROM AN ARTIST'S SKETCH-BOOK: THE ANGLO-JAPANESE EXHIBITION, AS SEEN BY FRANK REYNOLDS.

CHARACTERS AND CURIOSITY AT THE "JAP-ANGLO" JAPANESE, AINUS, AND FORMOSANS AT SHEPHERD'S BUSH.

Quite a number of Japanese, Ainus, and Formosans are to be seen at the Anglo-Japanese Exhibition at Shepherd's Bush, the Japanese plying arts and crafts of their land and showing their method of wrestling, the Ainus and the Formosans showing life as it is lived in their villages.

図　日英博覧会の様子（イラストレイテッド・ロンドン・ニュース　1910.7.9より）

聞紙ニ依リ其各種観察喧伝セラレタルカ為メ大ニ各国人ノ注意ヲ惹起シ日英博覧会閉会後、右出品物及余興ノ一部ヲ廻送シテ日本博覧会ヲ開設」したいという申し出が、ブエノスアイレス、ベルリン、フランクフルト、ロッテルダム、イギリス国内からはマンチェスター、グラスゴー、エジンバラの各都市の企業からあった。[32] ここまで余興ばかりが注目されてしまうと加藤の当初の目論見があたらなかったのではないだろうか。

外国での余興の大人気に反して日本国内における報道は大変冷ややかであった。七月七日の『万朝報』は「日英博の教訓」と題して、いかに日英博覧会が失敗であったかを説いている。[33] そこではまずイギリス側の出品について「博覧会の開会せらるるや、曩に英仏博覧会に競うて出品したる英国商工業家ハ極て冷淡の態度に出で、何程の出品をも為さず、……故に日英博の名ありと雖も、其実ハ日本の物品を陳列したるに過ぎずして、英国政府及び英国民の同博覧会に対する状況を見れバ、曩に英仏博覧会に対したる時に比して甚だしき冷熱の差あるを示せり」と述べ、それにもかかわらず、観客が多いのは相撲、軽業、剣劇等の余興、つまり見世物のためであると記している。失敗の原因は「英国の国情を知悉せず、英国人を視ると猶米国人を視るが如く、通商上、地勢上及び其他の点に於て仏国の英国に対すると我国の英国に対すると甚だしき相違あるを理解せず、我商工業家が未だ英人の称賛を博する程度に達せざるを知らざりしが為めなり」と述べている。しかしこの一週間後、『万朝報』はロンドンの外国人特約通信員の報告を載せている。ここには日本の出品により日英博覧会が成功したことが述べられている。[34] さらに七月二〇日には「日英博の大失敗」と題して「渡英中なる某官吏より文部省に達せる報告によれバ、日英博ハ意想外の大失敗にて、各種の計画全く外人の趣興背反したるため其注意を惹くに至らず、入場者極めて少数にして出品者の不平、関係者の失望其極に達せり」と伝えている。[35] また同紙は「日英博の解明」と題して大浦農相の話を載せている。[36] これによれば大浦は九月三日に日英博覧会の非難に対し弁明を試みたが、そこで大浦は博覧会の「成功不成功は閉会後貿易の増進如何によりて判定せざるべからず。……日英博に対する欧米各新聞が一様に日本の成功を唱へ居るのに反して、内地新紙が非難の声を発するは頗る心外に堪へず、その結果は求めて自国の名誉を毀損するものとはいはざるべからず」と述べている。

万朝報は日英博覧会が失敗でありその実体が日本博覧会であること、それにもかかわらず見世物のため観客が多いことを記している。一方、外国人特派員の通信では博覧会は成功であると報じている。つまり日本人の目から見れば、これは見世物中心の日本博覧会で、イギリスと肩を並べたい日本人としては甚だ不本意なものであった。しかし外国人の目から見れば、この博覧会は極東の小国日本の展覧会ということで珍しく、人も集まり、成功であったのである。

国内外で様々な批評を受けた日英博覧会は一〇月二九日、無事幕を閉じた。

第三章　閉会と評価

一　会場の景況

開会中から国内の新聞等では失敗と報道された日英博覧会であったが、一六九日の会期中、入場者数は八三五万人にのぼった。[37] ちなみに一九〇八年の英仏博覧会の入場者は約八五〇万人、会期は一七一日と日英博覧会とほぼ同じなので入場者数に関しては同等と言える。[38] 一方、一九〇三年に大阪で開催された第五回内国勧業博覧会の入場者は約四三五万人、会期は一五三日である。[39] 一九〇七年の東京勧業博覧会が約六百八〇人、会期一三四日であり、[40] 日英博覧会は国内外の博覧会と比較しても入場者数は決して少ないとはいえない。

しかし博覧会閉会後も国内での日英博覧会の評判は悪かった。例えば原敬は一一月二八日に「日英博覧会は全く小村が山師者のキラルフィーに欺かれて見世物興行をなしたるものにて英国政府の如きは毫も関係せざしり由なり、日英国交上の必要の如く議会に説きたる当局者こそ国民を欺きたるものなり」と痛烈に批判している。[41]

明治四四年一月二四日、小村は第二七帝国議会で外交の経過について演説した。[42]「昨年倫敦ニ開催セラレマシタル日英博覧会ハ、英国皇室竝ニ同国朝野ノ最モ深厚ナル庇護同情ノ下ニ、遺憾ナク其目的ヲ遂ゲマシテ、我同盟国々民ノ多数ハ該博覧会ニ就キマシテ、親シク我帝国文化ノ真相ト、深源ヲ知悉シマシテ、大ニ両国々民ノ親睦ニ資スルトコロガアッタ次第デゴザイマス、而シテ該博覧会ガ通商上ニ及ボシタル影響ニ至リマシテハ、其日英貿易将来ノ発展ニ貢献スルトコロ大ナルベキコトハ、本大臣ノ信ジテ疑ハヌトコロデゴザイマス」と自画自賛した。これに対しイギリスに五ヶ月間滞在して日英博覧会をつぶさに観察した立憲国民党の蔵原惟郭は反駁する。「日英博覧会ノ実況ハ、実ニ惨憺タルモノデアリマス、例ヘバ英国政府ガ出品シタルトコロハ其出品ハ教育部ニ関スルコトト、海陸軍ニ関スルトコロノモノガ一小部分デアル」とイギリス出品の少なさを指摘した。さらに主催者である博覧会々社の代表キラルフィーを「悪評判ノアル興行師」とし、英国実業界でのキラルフィーの悪評判、キラルフィーが主催した英仏博覧会では一八〇件以上の訴訟が出された事実、展示上のトラブル等をあげ、政府がこのような人物と契約を結んだことを攻撃した。さらに「此博覧会ハ即チ興行ノ博覧会デアッテ、見世物ノ数ハ実ニ無数デアルノデアリマス、而シテ其見世物ハ殊ニ角力ト台湾ノ生蕃ト、北海道ノ即チ『アイヌ』デス、ソレト台湾ノ喫茶店、此四ツノモノガ実ニ呼物デアッタノデアル、而シテ生蕃若クバ『アイヌ』ノ問題ニ付テハ英国ノ人道者ハ何故ニ此ノ如キオトナシイ『アイヌ』ヲ此博覧会ニ十銭、二十銭ノ入場料ヲ取ッタノデアルカ、英国ノ上流婦人ハ泣イテ私ニ其不当ヲ訴ヘタノデアリマス」と述べ「人道上ニ於ケル大失態」と糾弾した。そして最後に「此博覧会ヲシテ、日本ニ対スル尊敬ノ念ヲ沮喪冷化セシメタ事実ガアルノデアル、此博覧会ノ一大失態、日英間ノ情交ヲ冷

却ヲセシメタトコロノ事実ガアッタ」と述べている。

この答弁として大浦兼武農商務大臣は「日英博覧会ニ付キマシテハ、善悪共ニ評判ノアッタコトハ、諸君御承知ノ通リデゴザイマス、ソレハヤハリ世人ノ鑑定ニ任セルト、私ハ当初決心シテ居ッタノデアリマス。……日英博覧会ノ成功不成功ハ此博覧会ヲ開イタ後ニ我邦貿易ガ如何ニ発展スルカト云フコトガ即チ成功不成功ノ岐ルルトコロ」であると述べている。ではちなみに一九一〇年前後の対英貿易状況をみてみよう（表参照）。大浦は博覧会の開催主旨として対英貿易の入超を強調していたが、輸出が輸入を凌駕するに至ったのは、ようやく一九一五年である。日英博覧会開催年の一九一〇年からは貿易収支はむしろ悪化しており、輸入額も微増している。一五年から急に出超に転じるのは多くの説明を要しない。第一次世界大戦のためである。残念ながら大浦の言うような効果は貿易額には表れなかった。しかし博覧会の効果が数字になって表れることを実証することは難しい。博覧会ブームを巻き起こした一八五一年のロンドン万国博覧会もイギリス経済に様々な影響を与えたと言われるが[43]、その経済効果がどのような数字になって表れたのか測定することは至難の技である。博覧会の長期的経済効果は数字で測るものなのでは無いのかもしれない。

対英輸出入額表

	輸出額（A）	輸入額（B）	収支（A－B）
1905	13,039,401円	115,380,101円	－102,340,700円
06	22,553,409	101,311,362	－78,757,953
07	22,443,305	116,245,070	－93,801,765
08	25,521,404	107,794,569	－82,273,165
09	27,092,677	86,227,750	－59,135,073
10	25,781,364	94,700,911	－68,919,547
11	23,824,065	111,156,758	－87,332,693
12	29,791,898	116,146,973	－86,355,075
13	32,869,657	122,736,970	－89,867,313
14	33,086,274	92,302,307	－59,216,033
15	68,494,011	58,084,368	10,409,643
16	102,657,565	81,732,097	20,925,468
17	202,646,125	63,304,384	139,341,741

出典：『日本貿易精覧』（東洋経済新報社、1935年）より作成

二、出品物の売れ行きと出品協会

博覧会の成否をはかる重要事項の一つは出品物の売れ行きである。出品協会は会場内に売店を一二カ所設置し販売にあたった。販売は入場者数に応じて開会当初は好調であったが、七月に入ると避暑シーズンのため入場者は一時減少し「八月ニ入ルモ依然不況ノ形勢ヲ続ケ、殊ニ九月下旬ヨリ頓ニ寒気ヲ加ヘ秋風落葉ヲ飛ハスニ至リ会場内ハ頗ル蕭条索漠タル光景ヲ呈シ、夜間ノ如キハ殊ニ人影稀疎ニシテ全ク悲運ノ底ニ降下シ」したが一〇月に入ると再び好況を取り戻した。販売成績は出品総額九万三千九百一ポンドに対し、販売金額二万一千五百八八ポンド、販売率二二、九％であった。販売予想額

が一万五千ポンドであったのであるから、かなり良い成績をあげたことになる。出品物のなかで最も出品額（売価額）の多かったのは金属製品であり、以下、漆器、陶磁器、象牙鼈甲細工、刺繍、七宝、家具木製品、絹製染織物、綿毛麻染織物とつづく。最も売り上げのあったものは順に刺繍、陶磁器、象牙鼈甲細工、漆器、金属製品、家具木製品、絹製染織物、綿毛麻染織物である。販売効率のよかったものは順に花筵（一〇〇%）、緞通（八八、七%）、刺繍（四七、五%）、杞柳竹蔓細工（三八、六%）、綿毛麻染織物（三六、二%）、糸組編物携帯品装飾（三五%）、玩具押絵（三四、四%）、陶磁器（三三%）、紙製品（三二%）であった。[44] 金属製品とは銀製、銅製の置物や花瓶等であるが、出品額の大きい割には売れ行きはよくなかった。また、明治初年から万国博覧会における販売戦略としては、工芸品等、手先の器用な日本人の特徴を生かしたものを出品するのが通例となっていたが、今回の出品構成が明治前期と異なることは、綿製品を多く出品したことであり、その売れ行きも好調であった。

出品協会の活動は、博覧会終了と同時に終わったわけではなかった。例えば、神奈川県出品協会では一九一一年四月一六日、日英博覧会の反省会とも言うべく、報告会を尋常横浜小学校で開いた。[45] 協会は一九一〇年二月、会場に渡英総代と副総代を送り込んでいた。総代には宮川半之助が、副総代には椎野定が着任しており、一一年一月に宮川が四月に椎野が帰国するに及び、当会は開催された。ここでは①日英博覧会に於ける本県出品物と他府県のそれとの比較、②物品販売店の状況、③本館出品の装飾等が報告された。特に出品物の他府県との比較には重点が置かれていたようである。例えば当県の、「木製彫刻家具」については、「今少シク英人ノ嗜好ニ迎合スヘキ改良ヲ施サンニハ、将来有望ナル貿易品トシテ予想スル事ヲ得ヘシト雖モ、現在ノ状態ニシテ惛ムル所ナクンハ、単ニ英人ヲ以テ顧客トスル事ヲ得サル」と記されており、さらに「東京及ヒ大阪ノソレ等ニ勝レリ、即チ外観ニ於テ稍勝レタル点アルヲ見ルモ塗料ヲ用フル事ノ不注意ト、木材ヲ接続スル方法ノ不完全トハ其声価ヲ傷クル事多大ナリト云フヘシ」と報告されている。「陶磁器製品」については「装飾品ト実用品トノ間ニハノ売行上著ルシキ差違アリ、殊ニ今回出品セラレタル本県出品物ノ殆ント全部ハ、瀟洒ニシテ且ツ淡白ナル絵付ヲナセルモノ多ク、而シテソハ英人少クトモ該博覧会ヲ観覧セル英人ノ希望ヲ満タスニ充分ナラスト考フ」とし「石川県出品物ハ、比較的英人ノ嗜好ニ投セルモノトミルモ誤チナカラカンカ」としている。以下、レースや日本服、羽二重、鼈甲細工、七宝等に対し、イギリスでの評判と他府県との比較を行い、最後に「以上ハ素ヨリ日英博覧会ヲ基礎トシテ縷述セシモノニ過キサレハ、以テ直ニ一般の趨向ヲトス可ラサルハ論ヲ竢タス」と報告をまとめている。

政治家やマスコミは政府攻撃の材料を探すことに終始しており、このように出品者たちの地道な行動を評価するまでには至らなかったようである。博覧会の最も重要な部分は出品者が自他の出品物を

比較し、その優劣を認識して出品物をさらに改良していくところにある。神奈川県出品協会が日英博覧会において出品物を他府県と比較検討しイギリス人の嗜好等を調査分析したことは、大変有意義なことである。商品開発、改良において市場調査、商品の比較検討は最も重要なことである。

おわりに

小村寿太郎の働きかけにより、日英国交親善と貿易発展を目的に開催されることになった日英博覧会は、財政難にもかかわらず約二百万を投じられることとなった。日本政府が開催目的に日英関係を強調するにもかかわらず、イギリス政府はこの博覧会には直接関与しなかった。このため日英博覧会といっても主催者は日本政府とイギリスの博覧会々社であった。また、日英博覧会はその名に「日英」を冠してはいるが、イギリス出品物は少なく、入場者を惹きつけたのは日本の出品物、余興であり、入場者の目には日本博覧会に映ったのである。その中でも特に見世物興行が注目を浴びたため、イギリスでは人気が出たが、日本国内ではこれが批判の対象となり、その陰で地道に活動していた出品協会がマスコミに評価されることはなかった。出品協会によっては会終了後も反省会を開き、今後の対策を講じ、商品改良に勤しむ団体もあったのである。日英博覧会における日本からの出品物は五万四千七百余点、出品者総数一千百二六人であったが[46]、これを一九〇〇年のパリ万国博覧会（日本の出品物は二万六千四百六〇点、出品者総数が一千三百八四人[47]）と比較しても、かなり多数の出品があったことがわかる。

すなわちこの博覧会は、名こそ日英博覧会ではあるが、実質は日本博覧会であり、見世物興行ばかりが目立ったが、出品協会の活動等により日本産品も数多く出品されていたのである。見世物興行ばかりに目を取られれば、お粗末な催しという評価もできようが、見世物により多数の入場者を集め、日本産品を宣伝し、この入場者が販売額に貢献したことも事実である。博覧会が日英国交親善に貢献したのかは疑問であるが、マスコミが叩くほど悲惨な博覧会ではなく、出品者レベルでは実りの多い博覧会となったようである。

（註）

（1）山本光雄『日本博覧会史』一九七三年、理想社。

（2）「英京倫敦開催英仏博覧会ノ設備ヲ利用シ同所ニ日英博覧会開催計画ニ関シ稟申ノ件」『明治四十一年英京倫敦ニ於テ日英博覧会開設一件』一（外務省外交史料館『外務省記録』）。以下『開設一件』と略す。

（3）「日英博覧会ニ関シ意見照会ノ件」（同右）。

（4）「日英博覧会計画ノ内容確認ニ関シ訓令ノ件」（同右）。

（5）「日英博覧会ニ関シ回答ノ件」（同右）。アールスコートの類とは、小村報告によれば当時アールズコートで開催された各国博覧会で、営利目的だったという。

(6)「日英博覧会開設賛同ニ関シ閣議決定書」(同右)。
(7)「第二十五回帝国議会衆議院予算委員会議録(速記)第十一回」(『帝国議会衆議院委員会議録』四九、東京大学出版会、一九八八年)。
(8)「第二十五回帝国議会衆議院予算委員第五分科会議録(筆記)第六回」(『帝国議会衆議院委員会議録』五〇、東京大学出版会、一九八八年)。
(9)「第二十五回帝国議会貴族院予算委員会第一分科会議事速記録第九号」(『帝国議会貴族院委員会速記録』二二、東京大学出版会、一九八七年)。
(10) 日英博覧会出品協会残務係『日英博覧会出品協会事務報告』(一九一一年)一頁。
(11) 同右、第二、三章。
(12) 日英博覧会神奈川県出品協会『日英博覧会神奈川県出品協会事務報告』(一九一一年)七〇頁。
(13) The Imperial Japanese Commission, The British press and the Japanese-British Exhibition,1910,p74(『開設一件』二)。
(14)「日英博覧会名誉総裁推戴並英国側委員任命ニ関シ報告ノ件」(『開設一件』一)。
(15) 英国議会において「whether the Government intended to make any grant for the purpose or had offered any particular facilities to the promoters of the exhibition.」という質問に対しては「The answer to the last part of the question is in the negative.」と返答されている。(「日英博覧会ニ関シ英国議会質問報告ノ件」(同右))。
(16)「日英博覧会ニ関シ英国外務大臣ト会談報告ノ件」(同右)。
(17) 一九〇九年一一月一〇日付「陸奥広吉宛加藤高明書翰」国立国会図書館憲政資料室所蔵。
(18)「日英博覧会英国部ノ準備ニ関スル報告書写送付ノ件」(『開設一件』三)。
(19)「日英博覧会ニ関スル陸奥事務官報告写送付ノ件」(同右二)。
(20)「『キラルフィー』渡来ニ関スル報告書送付ノ件」(同右)。
(21)「日英博覧会開設契約書調印ニ関シ照会ノ件」(同右一)。
(22)「日英博覧会開設準備ト其ノ経営方針ニ関シ具申ノ件」(同右二)。
(23)「日英博覧会経営方針ニ関スル在英大使ノ意見ニ関シ回答ノ件」(同右)。
(24)「余興種類決定通知ノ件」(同右)。
(25) 前掲、The British press and the Japanese-British Exhibition.
(26)「博覧会状況ニ関スル電報写送付ノ件」(『開設一件』二)。
(27)『日英博覧会出品協会事務報告』二五頁。
(28)「日英博覧会事務局出張所報告書」(『開設一件』三)。
(29) 同右。
(30) 明治四三年六月九日付、徳富蘇峰宛小坂順造書翰(徳富蘇峰記念館所蔵)。小坂は明治から昭和にかけての実業家、政治家。明治四五年から立憲政友会に所属。日銀出身。
(31)『日英博覧会出品協会事務報告書』五〜二四頁。
(32) 前掲「日英博覧会事務局出張所報告書」。
(33) 一九一〇年七月七日「万朝報」(万朝報刊行会『万朝報』七二、日本図書センター、一九八七年)。

(34) 同右、七月一五日、ウォーカー夫人「日英博第二印象」。
(35) 同右、七月二〇日。
(36) 同右、九月四日。
(37) 同右、一一月八日、(『万朝報』七三)。
(38) C. Freman Murary, FRAMCO-BRITISH EXHIBITION 1908. COMPLIMENTARY BANQUET TO MR. IMRE KIRALFY, 1908.
(39) 博覧会要覧編纂所『第五回内国勧業博覧会要覧』一九〇三年、六〜七頁。
(40) 前掲『日本博覧会史』六〇〜六二頁。
(41) 原奎一郎編『原敬日記』第三巻(福村出版、一九六五年)五七頁。明治四三年一一月二七日。
(42) 「衆議院議事速記録第四号」(『帝国議会衆議院議事速記録』二五、東京大学出版会、一九八一年)。
(43) P.マサイアス『最初の工業国家』(日本評論社、一九八八年)二七三、二九二、三二八頁。Anthony Wood, Nineteenth century Britain 1815-1914, Longman, 1982, Second edition, p.168. ロンドン万国博は一九世紀イギリス経済の一つの指標として語られる場合が多い。Patrick K. O'Brien, 'Modern conception of the Industrial Revolution', The Industrial Revolution and British society, Cambridge, 1993, p.9.
(44) 『日英博覧会出品協会事務報告』一三九頁。
(45) 『日英博覧会神奈川県出品協会事務報告』四六〜五九頁。
(46) 『日英博覧会出品協会事務報告』一八〇頁、三四〇頁。
(47) 『日本博覧会史』二七〇頁。